

## フォローアップ・シンポジウム

### 「THE INSIDE STORY: ほっかいどうの通訳者たち」

日時：平成22年8月22日（日） 13:00-15:00

会場：札幌国際プラザ会議室3F

共催：財団法人札幌国際プラザ

HICOM（北海道通訳者協会）

「ほっかいどうの通訳者たち」編集委員会

北海道通訳アカデミー

パネリスト： 泉園子（HICOM 会長）  
大島剛（ルテニア代表）  
熊谷ユリヤ（札幌大学教授）  
後藤道（札幌国際プラザ/編集委員会）

司会 酒井宏祐（元道新スポーツ社長/インタビュアー）

久松：皆さん、こんにちは。今日は暑い中、フォローアップシンポジウムに参加いただきまして誠にありがとうございます。今回のシンポジウムは、財団法人・札幌国際プラザ、北海道通訳者協会、「ほっかいどうの通訳者たち」編集委員会、北海道通訳アカデミーの共催イベントでございます。最初に本日のパネリストをご紹介します。司会を担当していただきます酒井宏祐さん。英語会議通訳者の泉園子さん。同じく熊谷ユリヤさん。ロシア語の会議通訳者の大島剛さん。



国際プラザの後藤道さんです。シンポジウムの後、フロアからのご質問も受ける時間を用意しております。ぜひ活発なお話を進めていただければと思います。それでは酒井さん、よろしくお願ひします。

酒井：この本のインタビュアーをやらせていただいた関係で、今日も司会をやらせていただきます。後で申し上げますけれども、通訳者のインタビュー集は私の知る限り北海道では初めてです。日本でも初

めて、世界でも初めてだと思います。いろんな人から「内容もいいが、発想がいい」と褒めていただいております。この本をお読みになった方いらっしゃいますか。ありがとうございます。本を読んだ方には、「ああ、こういうことだったのか」ということを改めて感じていただき、まだ読まれていない方には「ぜひ読んで勉強しよう」ということになれば幸せだと思っております。それでは、まずこの本がどうして出来たのかということ編集委員の後藤さんから簡単にご説明していただきたいと思っております。

後藤：今回、編集委員会の5名の者でこの本の準備をしましたがけれども、特に久松伸一さんの大きな力があって完成しました。この中には8名の方が取り上げられておりまして、お読みになっていない方もいらっしゃるようですので、8名の方を短い文章と共にご紹介している目次をご紹介しますことで8名の方をまずご披露したいと思っております。



- 「切り拓いた道。先駆者として走り続ける」 齋藤彩子さん。
- 「言葉に導かれ、託された思いを伝える」 加島郁子さん。
- 「実践と教育と。言語のスペシャリストとして」 川内裕子 さん。
- 「ビザなし交流における『歴史の目撃者』」 大島剛さん。
- 「花開いた感性。次世代の育成に情熱を注ぐ」 熊谷ユリヤさん。
- 「五輪で学んだプロフェッショナルリズム」 鈴木千鶴子さん。
- 「『人生はサービス』。国際化を支えた挑戦者」 高橋寿一さん。
- 「通訳者の地位向上を掲げH I C O M創立」 泉 園子さん。

以上の8名の方をインタビューして収めさせていただきました。この四半世紀、国際化が大変急速に進んで、その中にはいろんな方が主役になったり光を浴びてきていますが、この中に取り上げました通訳者の方たちの力があってこそです。黒子として活躍をされていた方たちに光を当て、どのようにプロの道に入られて勉強されてきたか、通訳者としての思いとかそういうものを皆さんに知っていただきたいということがこの本を作ることになった経緯です。それから、書いたものに残すことで、今日も高校生とか若い方もお見えですけれども、この道にチャレンジしてみたいという方たちのお手本になる、教科書になるようなものになれば、私ども携わった者としては大変うれしいと思っております。本に書き足りなかったこと、含められなかったことが今日披露されると思っておりますので、お聞きいただければと思います。

酒井：ありがとうございました。この本で取り上げられている通訳者は会議通訳者。つまりガイドさんとかそういうのではなくて、正式に国際会議その他の会議で通訳をする会議通訳者のトップレベル、横綱、大関クラス8人を取り揃えて本にしたということです。最初に、インタビューをして感じたことだけを簡単に5点ほどまとめてお話ししたいと思います。ご年配の方はご存知かと思いますが、1960年代に「サドンリーラストサマー」という、エリザベステイラーの出した「去年の夏突然に」という映画がありましたけれども、本当に去年の夏突然に、今にして思うと8月26日に初めて一人の方をインタビューして、以来8人の方を順繰りにインタビューしてきたということでもあります。私も初めてお会いする方ばかりだったものですから非常に緊張したんですけれども、やるにつれて素晴らしい方々の



自分史を語ってもらうという意味で、これはもう心を入れ替えてやらなければ駄目だということで力を入れました。最初はもっと若い人にインタビューしてもらえと思ったという本音も聞かれましたけれども、老骨に鞭打って何とか8人のインタビューを終えたということでございます。私も現役時代から少し時間が経っておりますので、困ったことに口が動かなくなっている。3年間くらい、もう年金生活者に入っておりますので、アルコールが入れば

しゃべりますが、平場ではなかなか口が動かないということで困りました。通訳者の人の話を聞くと、やっぱり通訳する前には人によっては発声の練習をすとか、あるいは宴会通訳の場合は大きな声でしゃべらないと駄目ですから、事前に英語の新聞を声を出して読むとか、そういう訓練をするということで、私もまた訓練不足だという事を改めて知らされました。

本題に入りますけれども、5点のうちの一つは、やっぱり皆さん素晴らしい人だということです。言葉の達人というか、通訳の方というのは人の話を聞いて何を言おうとしているかということ解釈して、分析して、なおかつ再構成をしながら再表現するということです。非常に創造的な作業をやっておられるわけです。そういう意味では、何を質問しても素晴らしい日本語で文章になって返ってくる。そういう意味では、やっぱりすごいなというふうに思いました。

二つ目には、通訳者というのは言うまでもなく、お医者さんや弁護士と同じように大変な専門家であるということです。様々な知識を身に付けて、並々ならぬ専門的なスキルというか、能力でこれをこなしていく。そういうことをやっている、不断に努力した結果の持つ自信といいますか、そういうものが皆さんからみなぎっているということで、これもまた感心いたしました。

三つ目には、英語やロシア語が出来るんだから皆、海外で勉強しているだろうと思われるかもしれませんが、実は8人の方のうち海外に留学し、勉強されてきた方は4人です。残りの4人は、自分で勉強したり、あるいは通訳になった後に海外で仕事をされて磨きをかけたということです。海外に行ったら様々プラスの面が多いかと思えますけれども、海外に行かなくても、やる気になれば通訳者になれるという事を自ら語っていただけというふうに思います。その中で、同時通訳と逐次通訳というのがあります。同時通訳というのは人が話しているときに同時にペラペラと魔術師みたいにしゃべる人がいて、これはすごいなと思っていたんですけども、誰に聞いても通訳は逐次に始まり逐次に終わるという。つまり、いかに母国語で、しっかりと皆に理解できるようにしゃべれるかどうかということが最も重要であるということを皆さんおっしゃってまして、これもまた海外に行かなくても日本語をマスターすれば外国語もマスター出来るということではないかというふうに思います。

四つ目には、二点目の話とダブりますけれども、こんなに素晴らしい専門家にも関わらず、大変まだまだ理解が足りないといいますか、例えばクレジットカードを申し込んでも定収が無いから駄目だとか、ローンを申し込んでも駄目だとかというような扱いをまだ受けていることもあるように伺いますし、英語が出来るから通訳が出来るんだろうみたいに、まだまだ社会的な高い評価が弁護士や医者のように与えられていないというのは、私は大変な問題だと思います。後ほど、その辺の問題点についてお話をさせていただきたいと思います。

最後にはそういうことで、やはり北海道の国際化という事を考えると、言葉、話が出来ないとコミュニケーションが出来ないわけで、通訳の人の役割は北海道の国際化を進めるためにも大変重要であると

いうことを、改めてこの本で認識していただければ幸いです。それが、私がインタビューした感想です。

いよいよ本題に入りたいと思いますが、どうして通訳者になったのという疑問を皆さんお持ちだろうと思うんです。私も、まずそれをインタビューした時に聞いたのですが、この辺りを順に話していただきたいと思います。まず熊谷さんは、この間の新聞にも「声の記憶を辿りながら」という和文の詩集が載っていましたが、詩を作られる方でありまして、同時に大学で先生をやっておられるし、音楽もやられて、ハーブのタペで詩を朗読したり、大変幅広い活躍をされ、英語、米語のほかにも豪州英語などもこなす素晴らしい方です。当然、じゃあ通訳になるべくしてなったんだろうというふうに思われるかもしれませんが、実はいろいろとあったようで、その辺りからよろしくをお願いします。

熊谷：私が通訳になった経緯をある方にお話ししたら、風が吹けば桶屋が儲かる話みたいだなと言われたことがあるくらい、偶然の積み重ねでなってしまったということなんです。まず帰国子女ではあるんですが、小学校3、4年の時の海外経験だけなので、英語は日常会話だけでした。ある時に西山千さんのアポロ月面着陸の通訳を見て、通訳というのはとんでもないすごい人、神様がする魔法のようなものだと思って、自分には全く関係ないと思っていました。それから帰国子女ということで、当時は気が付かなかったんですけども、実ははじめにあっていて、なぜか英語が大嫌いで英語が出来ないふりをした方が皆に好感を持たれるということが身に付いてしまっていました。お嫁さんになって家でピアノを弾いたりするのが夢だったんですけども、姑と同居していて、ちょっと外に出たいなと思って英会話を教え始めて、そこで指導員になって、そうしてちょっと外国の教壇に立ちたいなと思ってアメリカに行って、帰国後、たまたま主人の転勤で東京に行き、派遣元だったNPOに雇っていただいた。そこでたまたまアメリカに帰るといふ人に、お願いだから通訳クライアントを引き受けてと頼まれて、「いやとんでもない。私、無理無理」とお断りしたんです。けれど、相手も一ヵ月後の帰国で切羽詰っていて説得されて、ついOJTに行ってしまう、通訳者になってしまったということなんです。



酒井：通訳者になりたくなかったという話ですが、なってみてどうですか。やっぱり良かったですか。

熊谷：仕事をいただき始めた頃は、予想に反して楽しかったですし、自分がプロ通訳者になれたことがうれしくて仕方がなかったんですけども、だんだん自分が完璧ではないということが分かりました。今振り返ると、当時のクライアント一人一人を訪ねてお詫びしたいくらいなんですけれども、やっぱり奥が深いということが分かってきました。

酒井：先ほどもご紹介いたしました。熊谷さんは英文詩も作られるし、ペンクラブにも入っておられるし、エッセイも書かれますし音楽家もされる。大学でも教えているということで、すごく幅広い活躍ですけれど、通訳というのは熊谷さんの中ではどんな位置を占めているんですか。

熊谷：今は同時通訳が主体ですので、その同時通訳の前の1週間くらいは100%それにかけています。その時々で朗読会の準備をするんだったら、それにもう100%かけて、それがダブってしまって、エッセイとか締め切りがあるものが遅れたりとかいうことはありますけれども、その都度その都度100%で、片手間でやっているのではないんです。そのためにどうしたらいいかという、寝る時間を削るというので、睡眠3、4時間とかいうのはザラです。死んだら眠れると…（笑い）。

酒井：じゃあやっぱり中心的な位置付けですね。

熊谷：通訳のシーズンでは、本業の教職に差し障りのない範囲で、中心的な位置づけです。

酒井：次は大島さんにお伺いしたいのですが、大島さんは留学経験はないんですが、英語ではなくてロシア語を勉強したという経緯と、ロシア語は意外と難しいという風に言われていますけれども、実はそうじゃないんだよという辺りをまずお話し願えますか。

大島：ロシア語をなぜ選んだのか。その事を話す前に、なぜ私は英語をやめたのかお話ししたいと思います。私は小学校3年生から高校3年生まで新聞配達をやっていたんです。子供のときから少しずつ自分でお小遣いを稼いでいたものですから、少し大人になるのが早かったのでしょう。中学校1年生の時に、私の英語のファーストティーチャーが嫌な先生で、宿題を忘れたら頭を叩くんです。普通にゲンコツで叩くんだったら許したけど、その先生はテカテカに磨かれた木の株を持って叩いたのです。その痛みが忘れられなくて、その行為が許せなかったので、英語は今後一切やらないと決めてしまったのが中学校1年生。中学校から高校まで英語の授業には出ました、でも英語はやりませんでした。何をやったかと言うと、英語の時間に本を読んだり別な教科の勉強をしたり。中学校2年の時、日中国交回復があって中国語を勉強しました。英語の時間に中国語。当然、漢字の辞書です。半年くらいは持ったんですけど、やっぱり先生が回ってきて漢字の辞書が見つかって怒られました。



高校2年生のときにオイルショックがあった。先生が、「これからは会社に入ったって会社が潰れるかもしれない。だから専門家にならなきゃ生きていけないよ」と言われ、そんな話を聞きながらテレビを回していたら、NHKのロシア語講座があったんです。「あ、ロシア語いいな。英語の時間にこれをやるんだったら持つかもしれない」と思って、高校2年生から3年生にかけて2年間ずっと英語の時間にロシア語をやっていました。でも発音できませんから、ロシア語の教科書を買ってきて、それを写経のようにノートに全部、日本語もロシア語も写して頑張ったんです。あとはNHKのテレビ講座、ラジオ講座などやって、歌を覚えては朝、新聞配達をしながら大きな声でロシア語の歌を歌いながら配達をしていました。高校が終わってどうしようかと思ったとき、せっかくロシア語をやったのだからある程度のレベルにいくまで頑張ろうということで、東京ロシア語学院というところの夜学に2年間入ったんです。昼間はお寿司屋さんで皿洗いやって、夜はロシア語。18から20歳まで2年間集中的にロシア語だけやったんです。

学校が終わった後にたまたま学校の紹介で日本のプラント輸出会社「東洋エンジニアリング」の面接

を受け嘱託通訳として入社しました。それから6年間ソビエトに派遣され、それで通訳になってしまったというのが経過です。実を言うと私は語学はやっていましたけれども、通訳になろうとも思いませんでしたし、なれるとも思っていませんでした。その当時、ロシア語で食べていけるとは考えられませんでしたから、ロシア語を習得してから英語を勉強して、「英語を長刀にロシア語を短刀に」世の中を渡っていきたいなと思っていたんですが、いつの間にかロシア語だけで通訳になってしまって、それから33年間通訳を続けています。

酒井：ロシア語を「短刀」に、英語を「長刀」にして就職をしたいという言い方を大島さんはなさっておりますが、今の話を伺っても努力されたことはわかるのですが、なかなか簡単に語学をマスターするというのは難しい。具体的にどういう勉強をされましたか。

大島：その頃、私は彼女がいなかったので、仕事以外はほとんどロシア語をやっていました。「ロシア語気違い」と周りに言われていまして、本当にロシア語しかやらなかった。移動中はいつもテープを聴きましたし、それから寝る時は必ずロシア語のテープを子守唄にして寝ていました。ある時、将棋の名人が「若い時に短い期間で6千時間何でもやりなさい。6千時間一つのことを集中してやれば、必ずプロのスタートラインに立てますよ」という事を言っていたんです。逆算すると、1日8時間を2年間連続してやれば6千時間になるんですね。私は高校2年の時から通訳になるまで4年間ありますけれども、6千時間くらいはやったかなと思います。若かったのと集中して出来たので、人よりも上手だったのは間違いないです。弁論大会でも準優勝してタダ旅行をさせていただいたり、学生時代でもちょっと通訳してよということがありました。そういう点でやっぱり集中的な勉強、方法は何でもいいと思うんですが、自分の好きなやり方で、例えば新聞読むんだったら、私は新聞で綺麗な女の子の写真がある記事を切り取って訳していました。何のテーマかわかりませんが、それを一応試しに訳したり。そういう自分の好きなやり方で集中的にやることかなと思います。

酒井：キーワードがたくさんありまして、恋人がいなかった事とか子守唄とかいろいろありますが、いずれにしる語学を習得するためには集中力と根気と継続です。大島さんの場合にはまさにそれを体現されて、おそらく北海道でこれだけロシア語が出来る人は大島さんしかいないんじゃないかなと、僕は個人的に思っています。努力すれば出来るということです。次に泉さんにお話を伺いたいと思っておりますが、泉さんはH I C O M、北海道通訳者協会を立ち上げられて現在は会長もしておられるという、大変リーダーシップのある方ですが、子供の頃にカナダに行かれて、向こうでネイティブを勉強されたということですが、その辺りからちょっとお話いただけますか。

泉：私の場合は小学校6年生の時に、親の仕事の関係でカナダに移住、永住するということになりました。その永住先が田舎の人口5千人くらいしかない小さい町だったので、他に日本語を話す人は誰もいないという環境だったんですけれども、そこで6年生から過ごすことになりまして、向こうの学校に入ったときはグレードセブンということで、同じ年



年齢の子供たちのクラスに入れてもらって、ほかの子と同じようにカナダの教育を受けたわけです。最初はテストを一回も受けなくてもいいからそこに座っていなさいという、本当にのんびりとした、これがカナダなのかなってような学校環境でした。その間に友達も作って英語でおしゃべりしながら1年はあっという間に過ぎて、2年目からテストも皆と同じで、きちんとした義務教育を受けるようになりました。数学だけは日本は進んでいましたので、これはもう私の時間だというふうに自信を持って、皆からも注目されましたので、劣等生にならずに何とか学校生活は楽しくできました。なので、私の場合はその6年生から大学卒業するまでカナダの教育を受けていましたので、外国語をマスターするとか勉強をするという点に関しては他の皆さんとは違っていて、自然に身に付いたということがあります。けれども、逆に日本語の方がおかしくなっていました。高校を卒業するくらいになりますと、やはり日本語のボキャブラリーも増えていませんし、英語のイントネーションが日本語にかぶさってしまいます。この人、日本人なのかな、何人なのかなという感じの日本語を話していたと思います。それで、たまたま商社の奨学金制度が私の大学、トロント大学にありましたので、3年生のときに日本に逆留学して1年間勉強いたしました。アメリカ人とかカナダ人とか外国人に混じって日本文化、日本語を学習するという体験をしまして、その後はカナダに戻って卒業致しました。

酒井：カナダの高校生るときから通訳になりたいというお気持ちを持っておられて、その後にやっぱりこれは日本語を勉強し直さないと駄目だぞということで南山大学に留学された。目的はそういうことでしょうか。

泉：高校の時にガイダンスというクラスがありまして、カナダの学校では、将来どういう職業に就きたいのかということをお早く自覚させるという教育を行っていました。まず、なりたい職業を見つけて、それに関してリサーチをして、それを発表するという内容のクラスでしたので、皆それぞれ好きな職業を調べてきて、その職業に就くためにはどういう勉強をして、どういう事をしなくてはいけないのかということをお先生が授業の中で皆に指導していたのです。私は、通訳と言えば皆は認めてくれるかなというような軽い気持ちで通訳と言っていました。それで自分の日本語はやはりこれでは駄目なんだなということをお自覚したということもありまして、思い切って3年生のときに日本に留学をいたしました。

酒井：先ほどもご説明申し上げましたが、1998年に北海道通訳者協会を立ち上げられたのは泉さんです。その関連で、通訳とはいったいどんな仕事なのかということをお話していただきたいと思います。通訳といってもいろいろありますよね。会議通訳もあるし、観光通訳もある。通訳のあり方でも同時通訳、逐次、ウィスパリングとかありますけど、その辺の話をわかりやすくお願いします。

泉：皆さんがよく目にされるのが多分、講演会とかシンポジウム、セミナーなどでステージの上で演者の方の側にいて通訳をされているという場面ですね。これは逐次通訳ということで、演者の方が英語なりロシア語なりで、ある程度のメッセージを伝え、いったん止まって通訳を入れるという場合です。その間、通訳はメモを取りながら、忠実に演者の方の言ったことを再現します。それと国際会議とか北大などのセミナーとかに行かれる方は、よく同時通訳というものを体験されるかと思うんですけど、同時通訳者というのは完全に見えない場所、ブースの中に入っています。2人だけ入れるブースの中にいて、15分くらい交代で聞きながら訳すという形態です。聞いている皆さん方はイヤホンを付けて、日本語なり英語なりを聞いている。聞きながら訳すということですから、我々の間では拷問室というふう

に呼ばれていまして、非常に緊張度の高い仕事の環境です。同時通訳者はイコール会議通訳者です。ですから名刺の肩書に「会議通訳者」と書いている場合は、その方は同時通訳が出来るという意味でもあります。あとは一般通訳です。これは商談などに入る通訳。レセプションなどの通訳も一般通訳です。ちょっとしたミーティング、それも一般通訳のレベルです。アテンドというレベルがありますけれども、これは例えば、お客様を千歳空港でピックアップして、JRと一緒に乗ってどこかへお連れするというようなタイプの通訳です。

酒井：いろいろな通訳のやり方があるわけですけど、知らない人は、私もですけども、同時通訳の人は魔法使いのようにすごいなと思って感心しているわけです。ただ、どなたに聞いても「通訳というのは逐次に始まって逐次で終わる」ということを言っておられますが、どちらが難しいですか。

泉：やはり逐次です。同時通訳は最初の駆け出しの通訳さんには出来ない技なんですけれども、逐次を何年もやっていると自然に訳が頭にたまってきますというか、訳出しが出来るようになってくるんです。それで、逐次の場合は演者の方が話し始めて終わるまで訳を全部頭の中にとめておく技術が必要なんですけれども、同時の場合は聞きながら、それをためないで口から出していく。記憶が消えないうちに口から出していけるということにおいては、同時通訳の方がやりやすいということが言えると思いますし、聞きながら文章構造が違う言語に訳すわけですから、完璧な文章で訳すことはかなり難しく、意味がわかるというような訳し方になります。完璧な文章をアウトプットする逐次に比べますと、同時の方がまだやりやすいという感覚になってしまいます。

酒井：通訳というのはただ言葉を、英語なら英語、ロシア語ならロシア語を日本語に置き換えるというような単純なものではなくて、そこには当然、文化の違いが背景にありますし宗教も違いますし、物の考え方も違う。その中でその言葉を聞いて、何が一番適切な訳なのか、あるいは話者が何を言いたいのかということを瞬時に判断して、それを再構築して再表現するという意味で、逐次は完全性が求められるということで難しいということをお泉さんはおっしゃったのではないかと思います。先に進みますけれども、通訳をうまくやるためのコツ、例えば、いかに相手の話したことを記憶に残してアウトプットするかというコツ、何か秘訣がございましたら泉さん、ちょっと教えていただけますか。

泉：私は通訳養成講座というか、そういう学校には通わないでカナダに6年生の時から大学卒業するまでいまして、また日本に戻ってきてからも日本語を勉強し直すというような体験もありましたので、自分で通訳のメモ取りとか、そういった技術を自分なりに実践しながら、自分には一番これが合ったメモ取りだなんていう方法を自分で考えるようにしました。そういう技術というのは学校で教えてくれるかもしれませんが、その中でも自分に合ったメモの取り方というのはあると思います。人が言ったことを100%言い返す際に、何もメモを取らずにというのはかなり難しい。責任問題にもなってきますので、きちんとメモを取りながら、そのメモに基づいてアウトプット、訳出しをしていくという、これは重要な通訳者の技術の一つではないかというふうに思います。また、言葉を一つ一つ直訳で、この言葉にはこの言葉というふうに全部ひっくり返すという直訳型ではなくて、五つか六つの言葉をまとめた上で、それが何を意味しているのか、チャンクで訳すというような解釈法も通訳者にとっては重要なことではないかと思います。何を言いたいのか、それを訳すというのが最大の使命だと思います。

酒井：チャンクというのは言葉の塊ですね。塊をポンポンと覚えて、それを出していくということですね。ありがとうございました。この話を続けると1時間にも2時間にもなりますので、とりあえずここで区切って、次は大島さんにお伺いします。東洋エンジニアリングに入って、ソ連の、普段は外国人が入れないような地域で6年間ロシア語を勉強してきたというお話を伺いましたが、日本に帰られてロシア語通訳で生活は出来たんでしょうか。



大島：その当時ロシア語通訳だけでは食べていけなかったと思います。6年間ずっと閉鎖都市で、ソビエト時代ですからまだKGBが強い時にKGBに監視されながら、小さな建設現場で日本人のスーパーバイザーがロシア人労働者に指示をして工場を造るお手伝いをしていました。私たちのための特別な寮があって常に監視されていました。6年間も向こうで仕事をすると、ソビエト時代って外貨が使えない国ですから、日本で給料が全部貯まって

いて、帰ってきた時にはある程度お金はあったんです。だからそれで生活がどうにか繋がったというのが現状です。実を言うと、長い間日本にいませんでしたから、帰ってきてすぐに新しい仕事を見つけるのは難しかったです。私はソビエトの仕事が終わった後に北海道に移住してきたんですけど、最初の頃はどこに行っても「通訳さん？ ロシア語通訳？ 1日1万円ね」という具合で、1日1万円だったんです。365日仕事をしても365万でしょ。土日もあるし、実際には稼働日数は年間100日くらいだった。1日1万円ですから100万円。全然持ちませんでした。3年4年と北海道に根付いて、いろんな方々から仕事を紹介され、そしてまたプロの通訳というのがこういうもので、やっぱり1日1万円じゃいけないという認識が周りに広がって、どうにかこうにか食べれるようになったというのが現状です。ですから通訳でスタートするときには石の上にも三年と私は若い人に言うんですが、3年はもう本当に必死にやらなきゃいけないと思っています。

酒井：とはいえ、北海道とロシアは引越しの出来ない隣人であり、日ソ関係、今の日ロ関係は好むと好まざるに関わらず、非常に重要な問題ですね。そういう意味では大島さんが日ロ関係、日ソ関係に関連した仕事で果たされた役割というのは非常に大きいのではないかと思います。私の伺っている限りでは、今の北方領土のビザなし交流も、これは発足の時からずっと19年間関わってきておられますし、その他貿易交渉、漁業交渉等々、通訳者として関わってこられた。つまり、ある意味では通訳者の一つの重要な役割である、歴史の証人というか目撃者といいますか、そういう役割を自ずと大島さんは果たしてこられたんじゃないかと思います。そういう意味では、通訳というのは交渉ごとの場合では間違えたら大変だし、歴史の証人である限りその辺も心してやってこられたと思いますがどうですか。

大島：実は、インタビューの見出しの「ビザなし交流における歴史の目撃者」という言葉を、酒井さんは最初「歴史の証人」と書かれた。実は今、ビザなし交流がまだ続いています。来年で20年になりますけど。通訳者というのは常に守秘義務があるんです。仕事のことについて外で語る権利は私たちにはないんです。ですから、どこに行っても「証人」にはなり得ない。そういうことで「目撃者」に変えていただきました。実際、私たちはいろんな歴史の現場に立ち会うことがあります。ビザなし交流もそうですし、北海道とサハリンの知事会談がもう20年以上やっています。それから北海道庁とサハリン、

ロシア極東との交流も20年近くやっていますし、北海道議会の議員さんとロシアの議員さんとの交流の通訳もやって、その間に1991年、ソ連がなくなりました。私が行ったときはソビエトだったんです。まさか、その国がなくなるとは思いません。あんな大きな国が15の国にバラバラになって。それで私の多くの知り合いがいつか国のない人達になってしまった。新しいロシアという国が始まりましたが、ハイパーインフレで今まで稼いだ何千万という貯金も一瞬にして何十万円になっちゃった。そういう本当に信じられないようなことを私たちは通訳という仕事を通して、日ロ関係だけではなくロシアの現状も見てきたという点では歴史の目撃者であると思っています。

酒井：熊谷さんにお伺いしたいんですが、熊谷さんは先ほどもご紹介いたしましたように語学の達人であると思うのですが、その熊谷さんでも、通訳というのはそう簡単なものではなくて、例えばIT関連とか医療関係とか、突然通訳をやれと言われてもある程度準備をしないと出来ないものと言われる。多くの方は、通訳業務の9割は準備なんですよということをおっしゃっていますが、その辺りを理解されていない方が結構いると思うのです。そうじゃないんだよというお話していただければ。

熊谷：先ほど泉さんが説明してくださった、一般通訳と会議通訳でちょっと差があるかと思うんです。私の中では「明るく楽しい一般通訳」「暗くて辛い会議通訳」ということで…。でも自分の勉強にもなって、国際会議のお役にも立てて、そして社会的にもある程度認めていただけるし役に立てるということで、犠牲を払う意味はあると思っています。その事前準備なんですけれども、もちろん一般通訳でもビジネス通訳ですと、会社の社員がずっとやってきたお仕事やプロジェクトを、いきなりその日とかに行って「よろしくお願ひします」と言って、30分くらいの打ち合わせで交渉に入ったりということですから、事前準備もかなり必要です。その資料を下さいと言っても「これは会社の秘密なので資料は出せません」とかと言われてしまうと、その30分だけにかけて、後は数字を間違わないようにと。その大変さです。



ところが会議通訳ですと、同時通訳が入るのは学術的ですか専門的なものなので、スキルは一応身に付いているとしても、そのボキャブラリーですとか英語で聞いて分からない、日本語で聞いても分からないことが多い。英語が出来る、出来ないではなくて、専門分野だから分からないというのがあります。この頃は環境関係等は非常に多いので、一応自分の中にストックはありますけれども、例えばこの間の環境関係ですと3ヶ月くらい前にお仕事をいただいて、蓋を開けてみたら内容は環境税と財政改革で、環境関係ではあったけれど、またすごくインプットが多くて準備が大変でした。

ところが会議通訳ですと、同時通訳が入るのは学術的ですか専門的なものなので、スキルは一応身に付いているとしても、そのボキャブラリーですとか英語で聞いて分からない、日本語で聞いても分からないことが多い。英語が出来る、出来ないではなくて、専門分野だから分からないというのがあります。この頃は環境関係等は非常に多いので、一応自分の中にストックはありますけれども、例えばこの間の環境関係ですと3ヶ月くらい前にお仕事をいただいて、蓋を開けてみたら内容は環境税と財政改革で、環境関係ではあったけれど、またすごくインプットが多くて準備が大変でした。

だいたい3人で1日の会議を分担しますと、資料は一人2センチくらいです。三分の一で2センチですけれども、パネルディスカッションが入りますと、他の演者のも読んでおかなければならないということで、それが2倍くらいになる。必ずしも資料が全部いただけるわけではない。事前に「何もないのでこれでも読んでいてください」と、その先生の書いた論文を渡されて一生懸命読んだと思ったら「あぁそれは全然関係ありません」と言われてしまうということもありました。資料がただで準備が辛いのは幸せなこと。いただけないときは手当たり次第、ネットとかで論文を探して勉強します。その上で打ち合わせの時間があれば質問も出来ますけども、

講師の方が視察や表敬や観光をしていたりして、打ち合わせの時間もない時は、もうそのままやらなければならない。時給で言ったら、きっと牛井のお店のバイトよりも全然低いですね。会議をやっている時間だけ見て3、4時間で何万円という一見高そうですけれども、その準備にかかる時間というのかなりなものですよ。ストレスの感謝料も出ませんし（笑い）。

酒井：最近、かなりその辺りが理解されてきたのかなと思っていたんですが、やっぱりまだまだ通訳の方をお願いするときに、こういう準備とこういう時間のストックが必要なんだという事が理解されていないということでしょうか。

熊谷：それはエージェントにもよります。きちんとしたエージェントが入って、資料を取っていただいて説明して日本側の主催者も理解していただける場合はいいんですけども、日本側の主催者が「高名な先生にそんなことを申し上げるのは失礼」だとか、「外国から到着されてすぐに資料を出せとは言えない」とかということで。これは新聞のコラムにも書いたことなんですけれども、物理関係の学会が去年ありまして、一番苦手な範囲なので何とか資料を下さいと言っていたんですが、ポスターしか来なくて。そのメインの先生の膨大な原稿は当日朝、会議直前に渡されました。演者の先生は原稿をそのまま読むということでした。原稿が無くて「話す」のなら訳しやすいのですが、「時間が限られているので早口で読みます」というのです。同時通訳は同時翻訳では無いので、それでは大変です。冗談交じりに、「資料がいただけなかったのが、事前準備を手広くさせていただきお勉強になりました」と言ったら「そうですね」と一言で済まされてしまいました（笑い）。こういうことを繰り返していくとすごく教養がついてこれを一生蓄えていけばすごい人になれるかもしれないんですけども、実際は短期記憶の勝負なのでもう残っていません。

酒井：何かやっぱりまだ、お前さんは英語が出来るんだからやってくれと…。

熊谷：プロなんだから資料や背景知識がなくても出来ると勘違いされることがあります。

酒井：通訳者の方は大変苦労しているということをとりにあえず理解していただいて、後でまた話を進めていきたいと思えます。後藤さんに二点、お伺いします。後藤さんは札幌国際プラザで、どちらかというと通訳者の方に仕事をお願いするというような立場で、様々な形で通訳者の方をご覧になってきたと思えます。まず通訳者と言ってもここにいらっしゃる横綱クラスの通訳の方だけではなくて、もちろん通訳でも横綱なんですけど、その語学力を活かしながら様々な活躍をしている方もいらっしゃいます。会場に鈴木さん、いらしていますか？ 今立ち上がられた方が鈴木千鶴子さんです。鈴木さんは、本当に通訳はもちろん、オリンピック関連でずっと通訳業務をやられただけじゃなくて、情報管理というか様々な情報を駆使して広報誌を作ったり資料を作ったり、あるいは北海道新聞社がやっている美術展のお世話をしていただくとか、大変マルチな活躍をいらっしゃいます。それともう一点、お話をされる方、今日いらっしゃるかどうかわかりませんが、特に行政の方のお話は何をしゃべっているかわからないということが多くて、その辺の通訳をお願いする時のしゃべり方の勉強もする必要あるんじゃないかという気がしておりますけれども。この二点について後藤さん、お願いします。

後藤：私達もいろいろな仕事の中で通訳さんをお願いすることがあります。もちろん会議通訳のような



分野もありますし、それから国際大会と呼ばれるスポーツとか芸術、文化の複数の国が参加して何かを行うというようなことの事務局をやったり、あるいは主催したりして、外国といろんなやり取りをしなきゃいけない、招聘もしなきゃいけないという時に、言葉だけじゃなくてやはり交渉術とか、いろいろな過去の記録を蓄積して、さっき熊谷さんが短期の記憶と言いましたが、それと対照的に長期の情報をご自身の中に蓄えている方が必要です。この分野はこの方とか、そういうよう

な形で私たちは仕事をすることがあります。そういう時には本当に語学の達人にプラスして、やはり企画とか情報の面でのバックアップをしていただける方、何人かそういう方いらっしゃるんですが、今回の本に入っている鈴木さんもその一人です。

例えば道新さんのジュニア国際アートキャンプというタイトルで始まった20年間の子供のプログラムは15カ国くらいの子供さんを招聘します。招聘するといっても窓口が必要ですので、その窓口業務を道新さんがもう分からなくなっても鈴木さんに聞けば分かるというような、そこまでご自分の中に蓄積をして、人とのネットワークを作っている。そしてそれは必ずしも英語圏の国だけじゃなくて、中国とか韓国とかそういう所の方とも信頼関係を作って、大きな事業の中で必要な人となっていくという、企画者であったりコーディネーターであったりというスタイルです。こういう方が、これからはもっともっと必要になってくる気がします。

それからもう一つ、酒井さんから今投げかけられた、通訳さんをお願いする立場として、これは本当に情報を準備して通訳さんが準備できるようにしていただくのはもちろんですけども、私ども記念式典とかいろんなレセプションをやります。そういう時に、お偉い方に登場していただいてご挨拶をしていただくとき、ご挨拶が日本側から三つくらいあるんです。そうすると日本語の言葉では三つ三様にそれぞれ書いてあるんですけど、英語にすると三つとも同じになるような内容があります。こういうのはやはりもう少し主催者が、自分にも言っていることなんですけど、やはり連絡を取りながら英語に直した時のことも想定しながら、三つの挨拶が見事にお客様に個性的に伝わるような原文を用意しなきゃいけない。それから原稿なしでされる方もいらっしゃいます。そういう方もやはり会場の中で、前の方のご挨拶とかを聞きながら、通訳さんが自分の思いを伝えてくれるんだという事を心に留めながら話をするとまた違うと思うんです。ですから、そういう意味で私達ももっと国際的な場面でスピーカーとしての質を上げていかなきゃいけないなというのは感じます。

酒井：まさに対話をしようとするわけですから、とりわけ言葉が分からない相手と対話をするわけですから、いかに話がうまく通じるか、あるいはどうしゃべればいいのかということですね。やはり日本人はその辺りが下手だと思うんです。私も含めて、その辺りの勉強をし直してやっていったらいいのではないかと思います。

次のテーマに移りますが、通訳者とは何であるかという、これは哲学的な問いかけであって様々な答えがあるんですが、いろいろな本を読んでみて、大きく分けたら次の三つくらいに集約できると思います。一つは言葉の壁を越えてコミュニケーションをお互いに図り合う、人類特有の宝といいますか、情報の伝達者であるということです。二つ目には単なる逐次的な訳ではなくて、相手の持っている背景の

文化と宗教とか考え方、こういうのも一応全部組み込んだ上で相手に分かるように話し、コミュニケーションを図る。そういう意味では、非常に情報提供の創造的な再構築者ではないのか。三つ目が先ほど大島さんがお話になりましたけれども、国際交渉の時に、非常に重要な会議の場で通訳者はその場において実際に話をするという意味で、証人は無理だとおっしゃいましたが、最低でも歴史の目撃者という大きな役割を通訳者の人は持つておられると思います。これはおそらく共通な答えだと思うのですが、それぞれの様々な思いがあると思いますのでお伺いしたいのですが、大島さん、ずばり通訳者とは何でしょうか。



これはおそらく共通な答えだと思うのですが、それぞれの様々な思いがあると思いますのでお伺いしたいのですが、大島さん、ずばり通訳者とは何でしょうか。

大島：通訳者はランクがあります。A, B, C, Dです。Aが10万円、Bが7万とか8万、そしてCで5万。Dで3万。プロのスタートは3万円です。そういう料金表を持っているので、対お客さんに対しては、通訳者にかけて「保険」と説きます。その心は「安心が大事です」。ですからお客さんが大事な仕事に行くという時は、安心を買ってくださいと私は言うんです。お客さんは安い通訳でいいと言う。当然です。でも何が起ころしてもしっかりした対応出来る良い通訳を連れて行った方がいいのです。そこでお客さんと私たちとのせめぎ合いがあります。保険と同じように通訳者というのは安心料みたいなところがあります。一緒にいるだけで、「あ、この人がいてくれると安心だ」って思ってくれれば嬉しいです。

それから私は、通訳者とは「日本刀」だと思うんです。その心は「切れ味が大事です」。包丁でもいいですけど。通訳もやはり切れ味の悪い通訳、お客さんが10秒話したのに通訳が20秒、30秒通訳する。やっぱりお客さんが10秒話したら10秒で綺麗にまとめるくらいの切れ味のいい通訳をして欲しいと思っています。それから、通訳者というのは救急車だと思うんです。必要な時しか呼ばれませんから。必要でない時にはただの人です。通訳者は必要性が生れなければ呼ばれません。そして救急車だからいつ呼ばれるか分かりません。夜中に電話が来ることがあります。急いできてくれって。あそこで船がぶつかったんだけど、明日の朝一番に飛行機で飛んできてくれとか。そういう事件もありますし、やっぱり通訳者というのは自分で自分の仕事の時間を選ぶことが出来ない。すなわち仕事に合わせながらやるから救急車と同じようにいつでも仕事に対応できる気持ちを持って欲しいと思っています。

それと、よく言うように、通訳というのは黒子です。国際会議で出席者の名札がありますが、通訳者のところは「通訳者」としか書いていない。私はそれでいいと思っています。今回はたまたまその会議に呼ばれたけど、次は呼ばれないかもしれません。そういう意味で黒子に徹してその場をまとめればいいわけで、通訳者が名前を残すためにその場にいるわけではないと思っています。

酒井：その他、透明人間であるとか、空気のようなものであるとか、いろんな表現を大島さんは言っておられますけれども、同じことだろうと思います。ただこの黒子論というのは様々な捉え方がありまして、私はどっちかというところと反対のほうなんです。黒子というのはご存知のように歌舞伎のときに黒い衣を着て役者の着物を直したりとかしますよね。普通のときは黒子ですけど、雪の時には白子といいまして白い衣装を着る。波のときには波模様の青い衣を着て。つまり、そこにいる人は存在していないとい

う約束事なんです。黒子とか白子とか青子が走っているけど、あの人はいないんだということが約束事で、それを持って通訳もそうだというふうに今まで言われてきたんですが、これには様々な意見もあろうかと思います。そこで泉さんにお伺いしますが、今のようなかからみも含めて、通訳者とはなんでございましょうか。

泉：私も、様々な文化を超えたところでのコミュニケーションを手助けする人だと思うんですけど、私は日本で育ってないというところもあって、黒子というのは何か抵抗を感じる場所がありまして、むしろインターフェイスとか、さらにもうちょっと別の次元から言うと、通訳者というのは導管という風に言えないかなと、実は思っているうちの一人です。というのは、通訳者というのは「エネルギーの解釈人」だと自分では思っています。言葉というのはその人が言いたいことの30%、いいところ30%は言葉で言い表してるけど、70%は別の手段で表現しているのではないかといつも感じています。同時通訳をやっているけど、ブースに入っているんで通訳者は見えないんですけど、私が演者の人が見えないと話が見えなくなっちゃうんです。ですから、必ず「演者の方が見える位置にブースを置いてほしい」とエンジニアの方にはお願いしますし、その人の顔が見えなくなってしまうと、何かを失ってしまうという危機感があります。

7、8年前でしょうか、個人的な経験から言うと、その頃から哲学者とかそういうたぐいの関係の方からは、言葉よりも、なんて言うんでしょうか「エネルギーを訳してほしい」というリクエストがあるんですね。なので、その人はアメリカ人であれば、私はアメリカの文化というフィルターを通してものを言うけれども、ここでアメリカの文化のフィルターを通して言ってもしょうがないと。なので、あなたが日本人としての日本の文化というフィルターを通してそれなりに言わないと意味がないだろうと。だからそこまで踏み込んで訳す必要があるのではないかと言われました。その次元になってしまうと、先ほど大島さんが言った、10秒の言葉は10秒で訳すというのは、もちろん大事なことはあるんですけども、そういう領域の通訳になってしまうと、時空を超えたと言いますか、時間とはまた関係ない、そのメッセージ、内容を重視した通訳ということになってしまっただけ。それも私は大好きな分野なんですけれども、エネルギーねって思い始めて、名刺に「通訳者」と書くより「エネルギーの解釈人」とか「エネルギーリーダー」とか、そういう風に名刺のタイトルを変えても面白いかなと思っております。

酒井：大変すばらしいお話で、熱っぽくなってまいりましたけれど、熊谷さんは異文化コミュニケーション論を大学でも教えていらっしゃる専門家でもあります。実際、いま通訳を通して様々な思いがあろうかと思いますけれども、いかがでしょうか。

熊谷：実は、5つくらいある研究テーマの一つがこれで、答えはきっと永久に出ないだろうと思うので、答えは「It depends」。つまり「その場による」「その時次第である」と。状況によって変わるということなんです。ただ一つ言えることは、やっぱり将来、自動翻訳機が発達して音声読み上げが出来ても、それは人間と同等の仕事は出来ないんで、翻訳者という仕事はなくなるかもしれないけれど、通訳者はなくなるとは思いません。それはやはり、声であり、人であるからで、人でなければ出来ないというのは、単に異言語間のコミュニケーションの橋渡し役であるだけではなく、経験から来る異文化間のコミュニケーションの知識や、その場その場に依って瞬時に判断する大人コミュニケーションの細かい気配りが必要であること、それから泉さんがエネルギーを伝えるという話をしましたけど、私の考え方もそれに似たところがあって、言い換えればその人のエネルギーだけではなくて感情とか、訴えたい時

に機械では訴えてくれないし、そういうエネルギーや訴えや、それから感情を伝えることが出来るのは人間だからであるし、また例えば、ある外国人のスピーチを通訳する場合、もしその方が日本文化社会に精通していて日本語が堪能だったらこういう言い方をするだろうということが出来れば理想なわけで、それがインタビューで言った「乗り移る」ということだと思わなければならない、そこまでは到達出来なくても、それを目指して行きたいと思います。

通訳者の社会的立場・役割・待遇も研究分野に入っている、人であるということはもう一つの面から言えば、人間として扱われるべきだということで、黒子の様に「いない」と思われるのではなくて、私の西山先生の講座を受けた時は、やはり「黒子です」と断言されていて、私がある時に「異文化言語コミュニケーターというのではいけないんですか」とお聞きしたら、「違います、黒子です」とおっしゃった。たぶん西山先生はライシャワー大使付きの恵まれた環境でいらしたし、同時通訳というのがご専門でしたので、それで良かったんだと思いますけど、私たちのような平凡な通訳者からいくと、やはり黒子ではないし、逐次通訳で人が見えていたらあり得ない。同時通訳でも泉さんがおっしゃったように、やはり人間であるからこそ出来るということで、声であり、人であり、「It depends」です。

酒井：なるほど。

大島：私が言っている黒子というのは、通訳をしている時について言ってるんですね。通訳をしている時には黒子になりきる。その代わり通訳をしていない時は通訳者は異文化間コミュニケーターです。日本の文化とロシアの文化の橋渡しする、知識人として活躍すべきだと、私は思っています。ですから黒子というのは、あくまでも通訳をしている時だけです。通訳している時にしなきゃいけないと思っています。

酒井：これは8人の方にインタビューをして、全員同じ質問をしたんですけど、人によって微妙に違いますね。それぞれが正解であろうと思いますが、なぜ私がこだわるかというと、やっぱり通訳者の方は非常に重要な社会的な役割を果たしているということから考えると、以前からの黒子はポチポチ脱却して、やっぱり自分達もこういうことをやって、こういう解釈をして、こういう通訳をしているんだということを社会の方により理解してもらった方がいいんじゃないかということです。必ずしも黒子だけではないのではないかと、今のような議論をしていただきました。

それで元の話に戻りますけれども、通訳の方は本当にあらゆる知識を吸収して、絶えず勉強して好奇心を持って前に進んで、仕事でも完璧なものを求められるという意味では、私はお医者さんや弁護士と同じ非常に専門的な職業職であるという風に思っております。にもかかわらず、通訳者の立場は必ずしも高い評価にはまだなっていない。正当な評価をされていないのではないかと、この危惧を私は持っております。日本の通訳翻訳者協会の会長さんですら住宅ローンを申し込んだら銀行ではねられる。つまり定収入がないからですね。というような悲しい現状もありまして、この辺はやっぱり何とか是正する必要があるのでは



ないかと思います。そういう意味では、泉さんは1998年に北海道通訳者協会を立ち上げられました。通訳者というのはご存じのように、いつ病気になるか分からないわけですよ。通訳を頼まれた時に、自分が病気でも「ちょっと私、風邪引いているから代わって」というわけにはいかない。つまり準備が必要ですから、とにかく孤独に立ち向かっていかなければならない。だけどそれだけでは駄目で、やっぱり仲間同士が手を結んで、何らかの待遇改善をやった方がいいんじゃないかということで、この協会を作られたと思いますが、その思いと具体的にどういうことをやっておられるのか、それと、その泉さん達の運動に対してクライアントの人々がちゃんと理解をし始めているのか、その辺りの話をしていたらと思います。

泉：通訳者とはよく「歩く百科事典」という風に言われることが多いんですけど、本当にいろいろな分野のお仕事をさせていただいて、その都度に専門知識というものを吸収してしまうという時もありますし、いろいろな知識をさっとではありますけれども頭の中のどこかに保留しておくところはあるとは思いますが。熊谷さんが言ったように短期記憶というところでもあるので、それがもしかしたら潜在意識の方に入り込んで必要な時に出せるのかもしれませんが、日常生活をしている段階では、いつも専門知識にアクセス出来るかというところではなくて、すっかり表面上では忘れてるので、忘れることもいいことかなと私なりに思っています。脳の専門家がたしか、忘れられない人は病気だという風に言っていましたので、忘れるというとは非常にいいことなのかもしれません。

HI COMの話ですけれども、仲間、熊谷さんもその一人でありましたけれども集まりまして、北海道に通訳者協会という団体があってもいいのではないかとということで1998年に設立を致しました。一匹狼的な、個性的な存在の方が多く、競争が非常に激しいというセクターでもあるんですけども、お互いに睨み合っているのではなくて協力をして、そして北海道のために若手の育成ということもみんな考えてくれたらいいかなということです。高橋寿一さんもその一人でありました。その若手の育成ということで通訳者養成講座とか、そういったことを始めの段階では積極的にやっておりました。そして仕事の紹介、自分が出来ない場合には協会の他のメンバーにご紹介するとか、そういったネットワークも必要でしたので、穴を空けないためにも、自分が出来ない場合は他の人を常に紹介できるデータベースと言いますか、そういうものがあってもいいかなと思いました。前からこういう団体を作ろうというアイデアは存在していたので皆さん賛成して下さいました。皆さんお互いに交流する中で名刺交換をしたり、英語以外の言語、ロシア語、ドイツ語、韓国語、フランス語、チェコ語など他言語間の交流も行っております。何か業界で問題があった場合、例えば待遇の問題で通訳者側から見て納得がいかないという時は皆さん一丸となってエージェントさんをお願いをするということも一度ありましたけれども、力にはなったと思います。

酒井：私の聞いている範囲では、最初の頃は、例えば会議通訳も一人で1時間も2時間も通訳をして、なおかつ夜の宴会も付き合えというようなことで一日中働く、その前に準備もしているわけですが、そういう過酷な、蟹工船ではありませんが、過酷な労働条件にあって、そうじゃないんだと。つまり同時通訳の場合は、人間だから一人15分が限度だと。したがって2時間の会議の場合には2人の通訳が必要だというようなことを規則に決められて、これをみんなに理解してもらおうという運動を具体的にやっておられるんですよ。そうですね。

泉：ホームページを設けておりまして、そこに一般の価格、通訳料金、それと労働条件を載せています。

会議通訳は、逐次通訳なら終日の場合は2人で行う。同時通訳の場合は3時間までは2人、終日の場合は3人から4人必要ですよ、という情報は皆様に提供しています。通訳と翻訳業務はまったく別個なんですね。でも英語を話せるんだったら翻訳もできるでしょうということ、通訳業務で契約しているにもかかわらず途中で翻訳業務を入れてくるというのは違反なんですね。そういうことを積極的に皆さんに分かってもらえるようにということで、情報を提供しています。

酒井：この専門的な職業にもかかわらず待遇面で本当に困っているんだというお話というのをたくさん私は聞いておまして、その辺のことを一番よくご存じなのが大島さんではないかと思います。具体的なケースで、お話をしていただけませんか。



大島：私はロシア語通訳者ですが、自分で会社を持っています。ルテニアという、ほとんどがロシア語の通

訳と翻訳の会社です。最近は何でもかんでも入札、通訳も入札、そういう状態になっています。今までなら通訳業務の入札は、通訳翻訳会社が応札していました。最近は何根がなくなり、旅行会社や人材派遣会社が応札しています。そういう形で、先ほども言いましたように、今の通訳料金どんどん下がっています。で、例えば環境の会議があって、日本とロシアの専門家が集まって現地視察をして、セミナーをする。その入札に参加して落札したのが旅行会社。旅行会社だとガイド通訳を使うんですね。旅行会社の人はガイド通訳が、環境の会議でも通訳だから出来ると思うんですよ。旅行会社ではロシア語知っている人がほとんどいませんから、案の定、環境の会議はボロボロでした。通訳者が鳥や植物の名前をまったく知らなかったのです。観光ガイドは出来るけど、そういう専門用語は全然知らなかった。各専門で動詞の使い方とか表現に特徴があります。ロシア語通訳者が専門用語を分からなかったので、専門家同士が英語でコミュニケーションして帰ったとか、そういう話があります。

最近、医療通訳も入札になって、何でもかんでも入札なんですね。要は安ければ勝てるんです。で、わが社はいつも負けています。ダンピングするつもりはありません。だから新しい仕事はほとんど取れないのです。今までの古い仕事が残っているだけです。これが現状です。じゃあ、通訳者の質ってどうやって判断するんだろう。一応お客さんも通訳の質を求めているわけです。環境の仕事なら、入札参加者に、そのレベルの通訳者を求めます。でも、そのレベルを判断出来る人が、その応札する会社にいるかどうか？旅行会社とか派遣会社なら英語が出来る人はたくさんいるでしょう。でもロシア語はほとんどいないんですね。入札には会社として応札するのでクライアントはそれだけで条件が守られると思ってしまう。でも質のチェックが出来ずに、受けた仕事はボロボロだったという話を聞きます。最近外務省でもそのような出来事があったように聞いています。外務省も入札を義務付けられているから。

じゃあ通訳の質をどうやって判断できるのでしょうか。実を言うと、通訳者には資格試験がないんです。ガイド試験はあるのですが、会議通訳者の資格試験はありません。「私が会議通訳です」と言ったら通訳なんです。名刺に「通訳」と書いたら通訳者になっちゃうんです。それが怖いんです。ですから、やはり私達のようにロシア語の専門の業者がいて、そこの専門の人達がちゃんとレベルを判断して、この

仕事はこの通訳者だったら出来るということをちゃんと保証しなければ、質が分からないと思います。だからロシア語だけではなく、その他言語は特に気をつけないと、どのような通訳者が来るか分からない。

酒井：この件については、まだまだお話ししたいことはありますけども、お二人の話で大変なんだなということをご理解いただければよろしいかと思います。最後の項目に移りますが、このインタビューをしても、皆さんは本当に通訳者になって良かったと、楽しんだということを異口同音に語っておられます。本当にそうなのか。あるいは「本当に楽しんだよ」ということを若い人に伝えたいということもあろうかと思しますので、その辺の話に移りたいと思います。通訳者は、異文化間の言葉の違いにもかかわらず、共通のコミュニケーションを図るという、これは大変知的なインテリジェンスな喜びですね。それともう一つは、交渉とか会議とか、あるいは文化的、歴史的出来事に参加するという社会的な喜び、この二つが大きい喜びではないかと思いますが、まず大島さん、何か通訳者を目指す人にアドバイスすることがございますか。特に、大島さんはロシアで6年間ロシア語をマスターしてきたにもかかわらず、やはり日本語を勉強しなければ通訳者としては一人前ではないという悟りを開かれまして、札幌に帰ってきて大学に入り、勉強し直したというような事があります。やはり日本語が出来ないと、なかなか通訳者として難しいということだろうと思いますけども、その辺も含めて通訳を目指す人に言いたいことがありますら一言お願いします。

大島：私は、高校を卒業して専門学校で2年間だけ勉強し、そのまま通訳になってしまったんです。通訳でソビエトの現場にいて、技術通訳として鍛えられました。「ハンマー持ってこい」とか、「グラインダー持ってこい」とか、「ここを、こうカッティングして」とか、そういう通訳ばかりしてたんですが、工事が完成に近づいた頃になると、日本から会社役員が現場視察に来ます。偉い人達がソ連側の偉い人達と交流して、食事会とか難しい交渉をする。そういう話を通訳していて、高卒の私には、日本人の話す日本語が見えない、日本語は理解できない現実にぶつかりました。6年間向こうで仕事して、ロシア語は上手になったのですが、このままじゃ通訳者として伸びていけないと思ったので、大学に入ることを決意しました。

日本中の大学を調べて、ロシア語関係では推薦入学で受け入れてくれる唯一の大学が札幌大学でした。ロシア語学科に入学したのですが、ロシア語は通訳レベルなので、ロシア語の先生に1年目、2年目は「すいません先生、授業に出なくていいですか」と言ってお願ひし、その間英語の授業を聴講しました。また私はなによりも一般教養を勉強したかった。心理学、音楽、文学など一所懸命勉強しました。腹が立ったのは、大講堂での授業中に話し声がする。私は何度もそういう時に、黒板の所に行って、先生が話をしている横で「静かにしてください」とチョークで大きく書きました。私はその時27歳です。10歳くらい年下の学生達が、私は自分のお金で勉強しているのに、その隣でしゃべっている、笑っている。授業を聞きたくても聞けない。もう腹が立ってしょうがなかったことがあります。

27歳から31歳まで札幌大学でお世話になって、いろいろな事を勉強しました。やっぱりそれがあって今の自分があるんだと思います。というのは、少なくとも大学で一般教養を教えていただいたことで教養のある人々の日本語が理解できるようになった。それが基礎となって様々な仕事の現場で様々な人々に会って、世の中がよく見えるようになったような気がします。

通訳の仕事は本当に楽しいと思います。通訳をすると毎回、新しい人にお会いできるんですね。偉い人とか、普通ではなかなか会えない人達とか。そのような人々の通訳をしながら一緒に勉強をさせてい

ただいている。それからただで海外旅行出来るのもいいことですね。私なんかロシアに自分のお金で行こうと絶対思いません。仕事で行ってるので十分です。自分のお金で行くんだったら南がいいですね。それから仕事とはいえレセプションなどで美味しい物が食べられることも楽しみの一つです。一番の楽しみはやはり知識が広まることだと思います。

酒井：泉さんも、もちろん通訳は楽しい、楽しいだけではなくて素晴らしいご褒美がいただけるんだということを話しておられます。



泉：私の場合も、駆け出しの頃はよくアルペンスキーとか、札幌の場合は冬季スポーツのイベントが多かったので、まずそこから場数を踏ませていただいて、そして通訳というのはこういう仕事なんだという経験をさせていただきました。ですからアルペンスキー、当時は富良野でやっていたし、宮様スキーは札幌でしたけど、そういうところから入りました。当時、猪谷千春さんという方がチーフでいらしたんですけれども、その方の下で働くことによって

リーダーの資質というものを本当に教えられたと思いました。本にも書いてますけど、駆け出しの頃ですから原稿無しのレセプションの挨拶などはブルブル体が震えて出来ないような状態でした。全日本スキー連盟の会長さんの挨拶を急に振られた時、私は金屏風の後ろに隠れた、というエピソードは本当の話です。そこで猪谷さんに叱られることなく、猪谷さんが逆に私に謝ってきたという前代未聞のストーリーが書いてあるんですけども、そういうお方とか、世界の成功している企業の経営者などを呼んでのセミナーでトップクラスの方のお話を間近に聞いていると、スピーチの内容だけではなくて、お人柄というものが見えてきて、側に座っていると何か私も影響されるような感覚に襲われるというか、それが非常に楽しいですね。それで仕事が終わってからも連絡を取り合う事もありますし、クリスマスカードを交換するということにも発展しますし、一回限りの出会いというよりもなんて言うんでしょうね、ご縁があって出会うという方が多いですね。

同時通訳の場合はブースに入っていますので、そういう長年続く交流というのはなかなか難しいんですけども、しかしながらいいお話を聞ける、何が成功の秘訣なんだろうか、何が人を生き生きさせて生き返させるのかなというところのエッセンスですよ。そういうものの共通点を探るという意味で非常に参考になるし、また自分の通訳の仕方を通して自分をよく見れるようになりますね。というのは、自分はこういう考え方を持っているからこういう風に解釈をしてしまうんだなという気づきが時々あるんですよ。それはお客様にも指摘された時があって、そうなのかって。自分は簡単に「NO」という風になかなか訳せないってところがあったんです。それをお客さんに指摘されて、そうなのかと。私の考え方にそれがあることがよく分かる。また本当にわざわざお金を払って発表者として招待される方々に付いて通訳をすると、世界のトレンドをすぐ見ることができる。大島さんも言いましたけど、世の中がよく見えてくる。先ほどの環境税と税制改革の話もそうですけども、世界でいま何が問題になっていて、どうしようか、どちらの方向にもっていかようとしているのか、という分野の基本的な情

報というものが発表者の原稿とか、周辺資料を読むと分かってくるので、大学に行かなくても授業を受けたような感覚になります。ですから知識の吸収という面でも非常に恵まれていると思いますし、また人間関係も広まりますし、こういう発想があったんだという驚きも体験もさせていただけます。ある程度情報を吸収できると自分なりの意見を言うことが出来る段階になるので、それは非常に知的活動といえますか、そういうものが欲しい方には、通訳という職業はお勧めだと思います。

酒井：もう付け加えることは何もなくて、本当に素晴らしいなと思いましたね。通訳は楽しいだけでなく、人生が豊かになっていくという意味で。次は熊谷さんですけれども、先ほどから何度も申し上げておりますけれども、元々は通訳になりたくなかったんですけども、今は大変立派な通訳になっておられる。同時に今は若い人を育成する事に力を注いでおられるという心変わりの心理と、いったい何を若い人に求め、どういうことをやってちょうだいというお話を普段しておられるのか。その辺をお聞きしたいと思います。

熊谷：西山千先生の講座でよく、通訳者はおしゃべりが好きで知的好奇心が強くなければいけませんと言われて、私は好奇心は強いのは分かっていたんですけども、やっぱり少し学んで分かってくるともっと知りたくなる。何か気になった時、いま調べておかなければいつか現場でそれが出て恥をかいてつらい思いをするというジククスを自分で作っていて、自分の知的好奇心がドンドン伸びてくるというか、広がってくる。泉さんが言ったような知的好奇心の喜びがあるという事と、つらくても使命感や達成感がある。

それから私は札幌生まれですし、道産子で、自分の故郷のために何か尽くす事が出来るという喜びということ。それから通訳教育の面では、夢を持っている若い人達の夢を叶えるお手伝いが出来るということ。私は「仕事を選ぶか子どもを選ぶか考えろ」と言われて子どもはいないんですけども、やっぱりその分だけ若い人の夢を叶えるお手伝いが出来る事がうれしくてしかたがない。私のように、もしかしたら通訳者はとても無理と思っている人だとか、逆に、通訳なんて単なる言葉の変換役と思っている人、そういう人でも、もしかしたら何かのきっかけで、こういう新しい世界を教えてあげられるかもしれない。逆に一生懸命英語をやっていて、そうして「なりたい」と言って来た方には、実際に自分の体験を伝えたい。通訳者はいろいろなノウハウを持っているんですけども、あと3年くらいで年齢的に言って引退かと思っている時にもったいない。自分がこれだけ知らず知らずに蓄積したものは、本を書いても書ききれないし、やっぱりもったいないと思う気持ちと、その二つですね。

通訳者養成教育をしていると、英語が出来れば通訳が出来るとかと思って来る方が多いんですけども、そうじゃないということで、スキルだけでなく資料の準備ですとか、いろいろな裏技とか、墓穴を掘らないためにとか、これまでの自分の苦い経験を踏まえて、いろいろな事を指導しています。そういう多面的なことを学んでもらって学んで実際にOJTとかでデビューするわけです。

ちょうど1年くらい前に私のブースと一緒に入ってもらって「レシーバーや携帯電話を切ってください」というアナウンスをして震えていた方が、もう同時通訳として一本立ちするとか、そういうのを見るとすごくうれしい。私の時にはそういう通訳教育を受けられなかったので、それを全部注ぎ込んで残して、何か人のためになっていけるかなという、何か偉そうに聞こえてすごく嫌なんですけれども、そういうことが改めて考えてみるとあるのかなと思いました。

酒井：あと数年で引退ということですが、熊谷先生がご健在のうちは、北海道通訳アカデミーで主任講

師として実際の通訳のやり方などを教えておられますので、ぜひ師事して勉強していただきたいなと思います。それで熊谷さん、通訳者というのは資質によるんでしょうか、あるいは育つものなんですか。

熊谷：英語が出来ても通訳が出来るわけではないけれども、逆は真ならずなので、英語を一生懸命ある程度まで勉強する気持ちがある人が通訳の訓練を受けることによって、もっとやる気、モチベーションが上がります。西山先生がおっしゃった、おしゃべりが好き、というのは言語感覚が優れているということかもしれません。また、初めて会った方に信頼していただいて、気に入っていただいて、そしてコミュニケーションのお手伝いをするので、対人関係のスキルがある程度備わっているということです。あとは知的な好奇心だから、気になったものをどんどん勉強する。その四つがあれば、あとは何かのきっかけと運ではないでしょうか。

酒井：育つわけですね。

熊谷：だと思います。私がいい例だと思います。

酒井：西山千さんという方は、ご存じの方が多くと思いますけれども、アポロの月面着陸の時に初めて同時通訳をテレビでされまして、声がまず素晴らしい。浪々たる声で、とうとうと通訳をされたということで、彼の通訳を聞いて通訳者になりたいと思った方は結構多いんじゃないかと思います。

熊谷：それを聞いて「無理」と思ったのは、私だけです（笑）。

酒井：その後、通訳もやっておられたし、そのほか勉強を教えておられましたよね。

熊谷：サイマルで。月に1回、札幌にいらしてたんです。

酒井：最後に、後藤さんに。通訳者の人々が国際交流に果たす役割というのはとっても大きいと思います。中国、朝鮮半島、ロシア、米国と陸、海を通して繋がっているわけですから、北東アジアに占める北海道の位置というのは高いわけで、いかに国際化を図っていくべきかという時、やっぱり通訳者の方の役割というのは非常に大きいだろうと思います。ただ会議通訳だけではなくて、ボランティア通訳もあるし、その他国際交流の場でも言葉が出来ることによってやれる仕事もたくさんあるかと思っています。そういう意味で、国際交流のために望むべきことを締めくくりにお願いします。

ろ

後藤：今日のプログラムの主役は、ここにいらっしゃる通訳者の方達ですが、皆さん瞬時に今日のような立場、頂点でお仕事をされる方になったわけじゃないと思うんですね。日頃、国際交流の事業をしていますと、本当に小さな事業から大きな事業まで様々ありますが、やはりコミュニケーションというのは、これはもう必須のことです。それから、昔は英語圏の人と話す時に必要な英語の通訳さんがほとんどでしたが、最近はいろいろな国、20以上の国が参加するような会議も大変増えました。そうすると英語圏でない人の英語を通訳をするとか、小規模でカジュアルなお話の時にも、そういう人の話を誰かに伝えるとか、まさにインターナショナルな言語としての英語というのが、これからもっともっと必要にな

と思うんですね。

何かの事業をやるときにももちろん通訳さんが必要なんですけども、先ほど孤独である、黒子とかという言葉もありましたが、一緒に事業をする仲間として通訳さんの位置付けをしないといけない。会議が終わったときの達成感とか成功した喜びを感じる時も、ついつい私どもは通訳さんを交えていないと思うんですね。ですから、今日の通訳さんは素晴らしいなと思ったら、皆さんも語学を勉強している立場であれば、とってもいい通訳していただきありがとうございますとか、そういうことをお話していただくことで通訳者の方達の孤独を少しでも解消できるのかなと思います。そして、そういう方達と出会えることが、また皆さんの次への勉強の背中を押すことになるのかなと思います。

国際語としての英語というのは、言葉で言うのは簡単ですけども、例えば中国の政治家だとか、音楽家でもいいです、それから韓流の映画俳優とか、そういう人達の名前、話題が出てくる話を英語で出来ますか。私は外国へ留学して帰ってきました、英語がしゃべりたいんです、英語でお手伝いさせてくれませんか、という方にたくさん出会うんですけども、そこでもう少し、自分がお話をして楽しいというところから一歩出て、前へ出ていろいろな人の架け橋になること。それから、英語圏以外の人も、お互いに英語を勉強していたから話ができて良かったねとか、そういう喜びを重ねながら勉強を続け、いま求められている通訳、先ほど大島さんの話にあった医療通訳とか法廷通訳、国際化が進めばそういうもののニーズがどんどん増えますから、ご自分が関心のある、あるいは自分の勉強の中でたどり着けそうな分野にチャレンジして欲しいなと思います。

日本語を勉強している外国人も以前より相当増えましたから、日本語で外国の方と交流するという場も増えてきているのは確かですけども、やはりいろいろな分野の通訳さんがこれからはどんどん、英語だけでなく必要になると思います。そういう意味で、いろいろな知識もあり、あるいは一目で人に信頼していただけるような、全人格で取り組んでいくのが通訳なのかなと思います。ちょっと1年くらい勉強すればということにはならない、長いチャレンジになると思いますが、多くの方が自分の好きな語学を活かしてお仕事が出来ると北海道の国際化も急速に進んでいくと思いますし、私達はそれを期待したいと思います。

酒井：ありがとうございました。本当に皆さん熱心に聞いていただいて、私も司会をやった甲斐があったと思います。20分ばかり質問の時間を設けておりますので、会場のみなさん、何でも結構ですから質問してください。

男性：大島さんに、お伺いします。

酒井：突然ですけども、通訳の方がどんな英語をしゃべり、どういうふうに素晴らしいのかをデモンストレーションをしてみたいと思いますの。まず質問を泉さんに逐次通訳していただき、大島さんのお答えは熊谷さんに同時通訳をお願いします。



男性：昨年まで国際交流に携わっていた者ですが、大島さんへの質問です。大島さんは「ほっかいどう

男性：昨年まで国際交流に携わっていた者ですが、大島さんへの質問です。大島さんは「ほっかいどう

の通訳者たち」の本の中でロシア語について、「発音が日本語に近く、英語より易しい。日本語の文章そのままの順番で語尾変化をさせながらロシア語に話すことが出来る」と話されています。具体的にどんな風になるのかご披露していただけますか。

泉：（逐次通訳）

大島：なるべく簡単に。「私はあなたを愛しています」という言葉がありますよね。英語の語順だったら、「私は、愛してます、あなたを」ですね。ロシア語というのは、格変化があるので一つ一つの言葉が独立しています。格変化とは日本語の助詞のようなものです。「は」とか「を」とか。ロシア語は助詞の代わりに語尾が変化します。英語だったら「I LOVE YOU」しか形はありませんが、日本語だったら「あなたを、私は、愛しています」「愛しています、私は、あなたを」とも言えますよね。それと同じように、ロシア語も入れ替えが自由なんです。助詞の役割をする格変化がしっかりしているので、日本語の文法どおりにロシア語を変えられます。ロシア語は書いたとおりに読めばいい言語です。英語のような特殊な発音は基本的にありません。書いたとおりに読んでいだけでいいのです。日本語的な言葉の流れのままロシア語に訳出することができます。

熊谷：（同時通訳）

酒井：ありがとうございました。私も実は、泉さんと熊谷さんの英語をいま初めて聞きまして、すごいなと感心しました。もちろん大島さんの答えも素晴らしかったんですけど、あらためて3人に拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございました。では次の質問です。

男性：会社の経営の一端に関わっている者ですが、ちょっと一般的な話なんですけど、楽天の三木谷さんが会社の中で英語だけを使うということで非常に話題になっていますね。2年計画ぐらいでやるそうですが、日本人同士の会議も会話も社員食堂のメニューも全部英語だけにすることを言われて大変話題になっております。それで何社かうちも、というところもありますね。三木谷さんの理屈は非常に単純で、グローバルな企業だから、グローバルな言葉である英語を使う、グローバルなビジネスをやるんだからグローバル語を使う、それだけの話だと、こういう非常にシンプルな論理です。一方、グローバルな企業で自動車のホンダは、英語で話さなきゃならない時は英語で話せばいいだけで、日本人だけの会議あるいは日本人が大半の会議にわざわざ英語を使うのは不自然だよと。どっちもどうかと思うのですが、例えば韓国とかインドのように事実上、英語を第二公用語にしているような所の世界的な発展の力というのは遥かに進んでいる。一方で日本は小学校や幼稚園から英語を教えようかという、「国家の品格」を書かれた藤原正彦さんは、まさしくアメリカに留学された、英語のよく分かる方だけでも、そんなことはない、まず日本語を教えろ、まず日本の歴史を教えろと。こういうことをおっしゃる方が結構いらっしゃいます。大島さんは、ソ連からお帰りになって日本の事を、一般社会の事を勉強したいので大学に入られたという。インドや韓国のことを考えると、特に幼児教育の英語となるとさもあり得るのかなと思えるのですが、言



葉の専門家の皆さんにご見解をいただければと思います。

泉：私はこの楽天のニュースを見て、良いことではないかなと思いました。というのは、いままで私が感じていたことは、日本の国内の英語のレベルの底上げが他の国と比べて劣っているということです。外国語の本で何かベストセラーが出た場合、日本の場合はすぐ翻訳が出ちゃうんですね。なので、一般の人は翻訳が出るのを待っていて、自分で原書を読まないという、何かちょっと甘えのようなところがある。サービスが行き届いている故に、待てば日本語版が出るというところで、なかなか一般の人の英語のレベルの底上げというところが進まないという風にいつも思っていました。

グローバルな人材ということでは、日本の企業は韓国、ベトナム、カンボジアとかそういう所から優秀な人材を日本に入れないと追いついていけないという状態にあると思うんですね。しかし、留学生の話の話を聞いていると、日本の企業に来て英語が通じないというところが非常にネックになっているんですね。社内でのミーティングは日本語で、一人ポツンとしている。英語を話せる社員はいるかもしれませんが非常に限られている。社内でどこに行っても英語が通じるという企業であれば、そういう優秀な人材を海外から入れていくことは出来ると思うんです。ここが、今の日本のすごく劣っている点で、韓国などは日本を超えていると思います。ですから、そういう運動を出来る企業から始めていった方がいいと思います。

また、いつも思っているのですが、日本人のものの言い方というのは筋が通ってない、論理的に言う訓練がされてないというところがあります。学校教育も、向こうではパブリックスピーキングという授業があって、自分の選んだテーマのリサーチをして、そしてクラスの前に立って10分なり自分の言いたいことを論理立てて言ってみる訓練があるんですね。そういう意味でコミュニケーターという訓練になっているし、いかに効率よく自分の事を伝えていくかというコミュニケーションのスキル、これは幼い頃から向こうの学校はやっています。日本にはそういう教育はないように思いますね。なので、日本人のセミナーでの質問を聞いていても、前触れが多い、イントロダクションの部分が多くて自分の言いたいことを言って、最後に質問を出すんですけど、今まで言っていたこととはまるっきり違う、180度変えたような質問をポツと最後に言って、私たち通訳者も演者も転げてしまう。どうしてそんなに変わるのかなと思うくらい関係ないことを最後に言って終わりということがあります。

そういうステージに立った場合、みんなに通じるコミュニケーションの仕方を身に付けていないと、耳を傾けてくれないと思うんですね。日本の場合は、やはり日本人同士で話をしていると言葉に出さなくても分かってよね、という何か甘えがあるというか、言葉に出さないけど雰囲気を読んでねとか、そういう要求があると思うんですね。私達もそこですごく苦労するんですけども、きちんと言いたい事は言葉に出して言うという、そこを日本人は逃げて通っているかなと。言葉に出しちゃうと責任を取らなくちゃいけない、それを取りたくないの悟ってよね、というところがある。でもそれは英語では許されないことなので、きちんと自分で責任を取れるような言葉を使ってコミュニケーションをするという意味では、英語を媒体としてそういう訓練を社員にするという意味では、英語がいいんじゃないかなと思っています。

大島：同感です。私たちロシア語の仕事をしていても英語を避けて通れないんです。英語が主言語として多言語の国際的な会議が行われます。日露の国際会議でも発言者から日本語ではなく英語の資料を頂くこともあります。英語の資料を読んでロシア語の通訳の準備をします。英語はもっともっと社会全体で勉強すべきですし、せつかく中学校から、また小学校から英語が始まりますが、これだけ英語を

勉強しているのに使える英語がほとんどないという現状を見ると、もっともっと力を入れるべきだと思います。

酒井：時間が迫ってまいりました。通訳者を目指したいんだけど聞きたい、という質問がありましたらどうぞ。

女性：遅まきながら最近、通訳者を目指したいなと思っている二児の母です。聞きたいことは2点で、通訳の仕事に年齢的な限界があるかどうかということ、もう一つは、通訳の仕事はやはり東京にすごく



集中していると思うんですけども、マーケットとしての北海道のこれからの見通しはどういう風に考えていらっしゃるかお聞きしたいのですが。

酒井：熊谷さんにお答えさせていただきます。

熊谷：まず年齢制限で、私がさっき引退の話を出してしまったんですけど、会議通訳のストレスの多いのは、やはり資料の字もだんだん見えなくなるし、反射神経が鈍るかなということがあるので、いきなり大分年を取ってから会議通訳でデビューというのは結構難しいかもしれません。私はこれまで研究のフィールドワークとして通訳活動をしてきたので、適切な時期にそれをまとめる活動を始めたいと思っています。会議通訳者全体を考えてみれば、かなりのご年配になっても益々活躍している方がたくさんいます。会議以外の通訳では、一般的には結構、年配になってからの方が教養もついて、落ち着きもあって、お客さんの信頼も得やすいということで、分野にもよりますが、ギャルみたいな人よりはエージェントの方も派遣しやすいのではないかなと思います。学ぶ意欲があれば、それに通訳というのは男女差別がないスキルの世界なので、女性の自立という意味でもいいですし、毎日毎日、仕事が定期的にあるのではないので、たとえ二児の母でも今思えば出来たと私も思いますし、家庭と両立する事は出来る仕事だと思います。それから地方の需要というのは、通訳だけで食べている人がどのくらいいるかということは別。東京ほどはないのは確かですけども、アカデミーの生徒さんの中にも企業内通訳が決まった方がいるし、それから英会話を教えながらですとか、翻訳をしながらというプロの方もたくさんいます。

それから、実際に専従の通訳者にならなくても、通訳者としての経歴があることが、新たな職を得る際にプラスになるということもあると思います。ちょっと個人的なことですけども、私の場合も、通訳者だから私の大学の専任の就職が決まったと思っているんですね。公募でしたので100人近く応募したらしいんですが、応募した時に、何が差別化だったかということをおと振り返ってみると、もしかすると通訳者だということ、単に英語ができるだけではなくプラスアルファを買われたのではないかなということがあります。何もみんなが会議通訳者になる必要はないけれども、そういう英語を使った仕事をして行きたいと思う時に、通訳の素養とと実力とチャンスがあればかなり道が開けるので

はないかと思えます。

大島：通訳者は、ロシア語も英語もそうだと思いますが、実力の世界です。実力があって光って見れば、いくらでも仕事はあると思いますよ。いま通訳が大勢いて、余っているから通訳になれないんじゃない、実力や高い能力さえあれば必ず世の中が拾ってくれます。

酒井：今日は本当に長い間ありがとうございました。素晴らしいまとめの挨拶も考えていたんですけども、もうやめます。皆さんがお話になった事をそのまま受け止めていただければと思います。最後に主催者から一言お願いいたします。

久松：パネリストの皆さん、参加者の皆さん、長い時間どうもありがとうございました。普段なかなか聞けないようなお話もあったかと思えます。通訳者の皆さんはこうしてニコニコされていますけど、非常に苦しい経験を経て、今日ここに立っているということがよく分かったような気がします。皆さんも夢を持って頑張れば、きつとこういう風になれるという良いサンプルでもあるかと思えます。本当に実りのあるシンポジウムでした。いま一度パネリストの皆さんに盛大な拍手をお願いいたします。